



京都市文化観光資源保護財団

会報

No.61



もくじ

京のよさをまもって(23)「東京遷都と京都」

財団法人伝統文化保存協会理事長 石川 忠 P 2

京のやしろと文化財(4)「伏見稲荷大社と文化財」

伏見稲荷大社宮司 坪原喜三郎 P 4

わたしと京の文化財(25)「稻生若水の墓誌銘」

京都市歴史資料館歴史調査係長 伊東 宗裕 P 6

京の伝統行事芸能(23)「六斎念仏」

京都六斎念仏保存団体連合会会長 塩見 和男 P 8

保護財団の活動

P 11

会報題字 理事長 上山善紀
表紙 六斎念仏「獅子と土蜘蛛」

会 報

No.61

1992. 9. 1

編集・発行

財団 京都市文化観光資源保護財団
法人

京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内
〒606 電話 075-752-0235 (代)



京のよさをまもって (23)

東京遷都と京都

石川 忠

慶応4年(1868)、江戸が東京と改称され、明治2年、広大な緑と殿舎の京都御所、数々の御陵、ゆかりの門跡寺院の京都をあとに、天皇は京都を離れ、事実上の東京遷都となった。その間、京都市民らは遷都を死活問題と考え反対の声をあげた。

町組代表が「町旗」を掲げ御所に参入しようとしたり、一般市民が北野天満宮に参詣して東幸の中止を祈願したり、御所や京都府などへ嘆願するものも多かった。こうした動きに保守的な公卿や諸侯が呼応し反対運動が盛んになったため、明治政府は東幸が遷都でないと諭告を発したりして市民をなだめた。

東京遷都によって京都が受けた打撃は大きく、富豪の商人や皇室御用達の菓子司など技術者がそっくり東京に移ったため戸数七万戸と称されたのが、一万戸も減少したという。

こうした衝撃に京都として古都をどう回復するかが課題になり、御下賜金で伝統産業の技術革新や、新産業の育成・近代化の基盤形成ともいうべき琵琶湖疎水事業を手がけた。

明治23年には、蹴上で水力発電が行われ、その電力を利用して明治28年には日本で初めての路面電車が動いた。西陣織や京友禅、京焼など伝統産業の隆盛の基礎はこの時代に築かれた。

都が東京に移ったとはいっても、皇室と京都の関係は切れたわけではなく、大正、昭和と引き

続いて天皇即位の大礼が行われ、その後も天皇皇后両陛下、各皇族方のご入洛も相次いだ。

また、関西の復権、京都文化の再興が叫ばれる中で、京都市民にとって待望久しい京都御所でのお茶会は、昭和56年10月15日、両陛下のご入洛により、遂にその実現もみたのである。

さらに、戦後、急速に経済成長をみせてきた日本は、世界の驚異であり、各国首脳の間は期せずして京都に注がれるようになり、宮内庁京都事務所長として、昭和27年より昭和50年までの私の在任中、国賓、公賓としてお迎えし接待した外国賓客の数は実に四十に及ぶ。

即ち、戦後最初の国賓としてエチオピア皇帝が、日本を訪問されたのが昭和31年であった。これをきっかけとして、日本の招待外交に応じて来訪された各国元首、皇族、大臣の数は百組を超える盛況であった。その中で特に京都を訪ね、迎賓館としての大宮御所に宿泊された貴賓は十四組にのぼり、京都や大阪のホテルに滞在されたものは二十一組を数えた。

昭和49年11月のフォード米大統領、翌50年5月エリザベス英国女王を京都にお迎えし、女王が京都より東京に帰られた時、赤坂の迎賓館に待ち受けておられた昭和天皇が、開口一番、京都はいかがでしたかと質問されたことは、当時の全国の国民が、テレビを通じて気づかれたことと思う。

それ程、国賓の日本訪問の場合には、日本のほんとうの姿—古い日本的な姿—を知るには、まず、京都を訪問しなければならぬということが、一つの道になっているようである。フォード大統領も僅か一泊であったが京都を訪ねられ、エリザベス女王は京都一泊、鳥羽一泊とい

うことであったが、やはり関西を指向して来られた。関西特に京都という古い都市が、いかに外国のお客様に魅力的であるかということが判る。

平成6年、京都は建都千二百年を迎える。かつて、桓武帝のとき建都に挺身した人々の壮大な帝都建設のロマンを遥かに偲び、その後いくたびか訪れた歴史の転換期を、雄々しく乗り越え、新しい時代を逞しく切り拓いてきた先人に劣らぬ、叡智と情熱を結集して、子孫に恥じぬよう永遠に悠久の古都たらしめたいと、希うや切なるものがある。

(財団法人伝統文化保存協会理事長)



京都御所紫宸殿



京都御所



京のやしろと文化財（４）

伏見稲荷大社 と文化財

坪原 喜三郎

当社では、本殿及び御茶屋が重要文化財に、また荷田 春満旧宅が史跡として指定されています。

当社は、元明天皇の和銅 4 年（711）2 月初午の日に深草の長者秦の遠祖伊呂具が、稲荷山三ヶ峰に祀ったのが始まりと伝えられています。

以来、平安時代には既に稲荷三社が山下から山上にかけて存在していたことが、蜻蛉日記や枕草子 更には中 右記・台記等に記されており、その中でも山下の社を下社、山上の社を上社・中社と呼称されるようになったもので、この山麓の下社こそが稲荷社を代表する本社であったと伝えられています。

其の後、延喜 8 年藤原時平、文治年間源頼朝、永享 10 年足利義教等によって社殿の修造が行われてきましたが、当社の社頭を始め稲荷山が戦場となった応仁の乱（1468）により社殿は勿論のこと一山灰燼に帰したと伝えています。以後、山上の社殿は遂に再興を見ず、神蹟としての祭祀の場となり、山麓の本殿は延徳 3 年に



伏見稲荷大社本殿（重要文化財）



ふし み い な り た い し ゃ
伏見稲荷大社

（京都市伏見区深草藪ノ内町）
宇迦之御魂大神を主神とし、佐田彦大神、大宮能売大神、田中大神、四大神をまつる。全国 4 万におよぶ稲荷神社の総本宮である。和銅 4 年（711）秦氏が稲荷山上に鎮祭し、弘仁 7 年（816）現地に社殿が移されたという。仁寿 2 年（852）祈雨奉幣いらい朝廷からたびたび勅使がつかわれ、五穀豊穰、家業繁栄の神として古くより庶民の深い信仰をあつめ、今日、稲荷山には信者から寄進された朱の鳥居が林立していて壯観である。社家には、代々学者が多く、江戸中期の荷田 春満は学者として有名で、その旧宅が保存されている。

社殿（重要文化財）は応仁の乱で焼失した後明応 8 年（1499）に再建され、権殿（若宮）は本殿造営の時、神璽を一時移しまつる御殿で天正 17 年（1589）の建築。後水尾天皇の仙洞御所にあった御茶屋（重要文化財）も当社に移建されている。例祭は、5 月 3 日。1 月 5 日の大山祭、2 月の初午祭、11 月の火焚祭も多くの参詣者にぎわう。

再建が始まり、明応 8 年（1499）に完成いたしております。しかし、本殿等社頭が整備されたのは、天正 16 年（1588）豊臣秀吉や元禄 7 年の徳川綱吉等の大造営により、五社相殿の流麗優雅な流造の社殿が完成されたのであります。

殊に、豊臣秀吉は当社に対する信仰篤く、天



明応 8 年（1499）に建造された本殿（外観）

下統一後満足稲荷社や出世稲荷社を勧請しております。また、大政所の病氣平癒を祈願した「命乞の願文」が伝わっております。

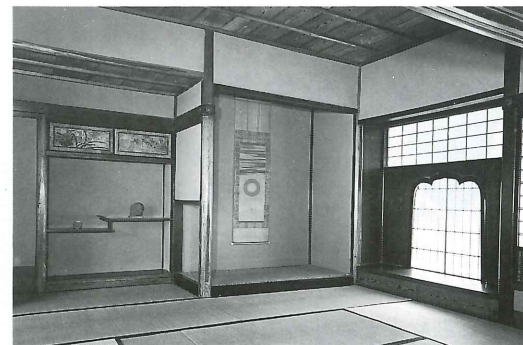
今度大政所殿煩於本腹者 為奉加壹万石可申付条 弥可抽懇祈事専一也 猶々命三ヶ年 不然者二年 定ニ不成ハ三十日ニテモ

六月廿日 （秀吉花押）

もし本腹したら一万石を奉加するとあり、なお命を三ヶ年延ばしてほしいが、それがむずかしければ二年でもよい、それも叶わぬならば三十日もよいと猶々書に記しています。

次に当社に伝わる御茶屋は、江戸時代の初期、後水尾天皇より当社社家で、当時上北面として院に出仕していた祠官荷田延次が賜わった建物で、瓦葺入母屋屋根の腰に桧皮を葺いた書院風の茶席で、花頭窓・欄間・障子・天井・違棚・襖金具等に特色があり、天正年中の造建と推定されています。社伝によると仙洞御所内にあったものを、寛永 18 年（1641）に移設されております。またこの御茶屋は、作風から見て遠州好みが随所に示されている建物であります。

最後に荷田春満旧宅は、外拝殿の南側東丸神社に接し、土堀に囲まれた当社社家羽倉家の旧



写真上：仙洞御所より移建されたと伝えられる伏見稲荷大社御茶屋（重要文化財）
写真下：史跡として指定されている江戸初中期の学者荷田春満旧宅

屋敷地で、現在は旧宅のうち一軒（書院）と門などが残されています。この建物は屋根棧瓦葺で、四柱造りを二つ連ね、内部は玄関・内玄関・主屋・書院・次の間等で構成されています。残念ながら詳しい建築年代は解っておりません。

（伏見稲荷大社宮司）

稲生若水の墓誌銘

伊 東 宗 裕

左京区浄土寺真如町、というより真如堂門前の北に迎称寺という時宗のお寺がある。同寺の住職河井氏から歴史資料館に電話があったのは、ことし4月10日のことだった。迎称寺は本草学者稲生若水(1655~1715)の墓所として、本草学に関心のある人には知られているが、若水の墓を改葬するためにほりおこしたところ、銅板の墓誌銘がでてきたというのである。

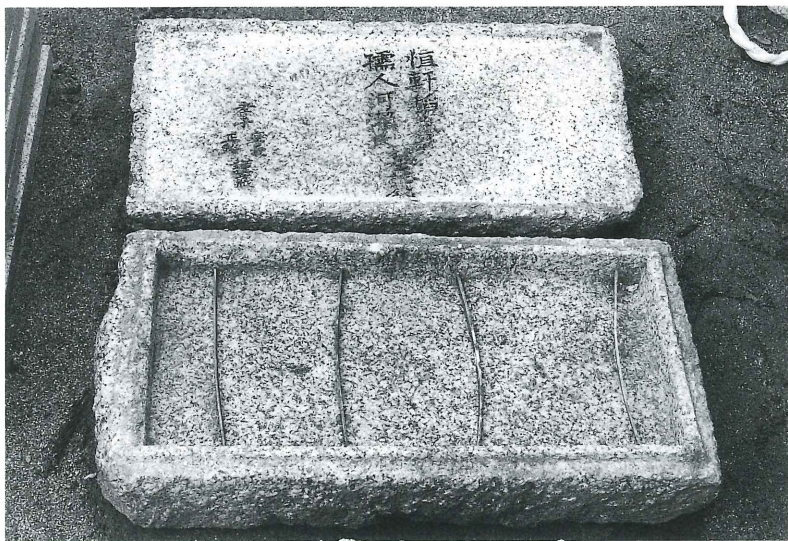
以前からわたしは石や金属にほられた、いわゆる金石文に関心があり、さっそく拝見にいった。ものは4点。石の容器におさめ、その容器を墓中にうめている。1)稲若水先生墓誌(松岡玄達撰/銅板24.2cm×13.9)、2)祭稲生元二文(稲生若水撰/銅板18.2cm×15.2)、3)恒軒先生稻生君墓誌銘(伊藤東涯撰/銅板24.7cm×48.6)、4)孺人河瀬氏墓誌銘(伊藤東涯撰/銅板24.8cm×48.6)、以上である。1)は若水の墓誌、2)は若水の子供の祭文、3)は若水の父親恒軒の墓誌銘、4)は若水の母の墓誌銘。

墓誌は故人の経歴、業績を叙述した文章で、これに銘という韻文が付属すると墓誌銘となる。金属や石に彫刻し、墓の中におさめる

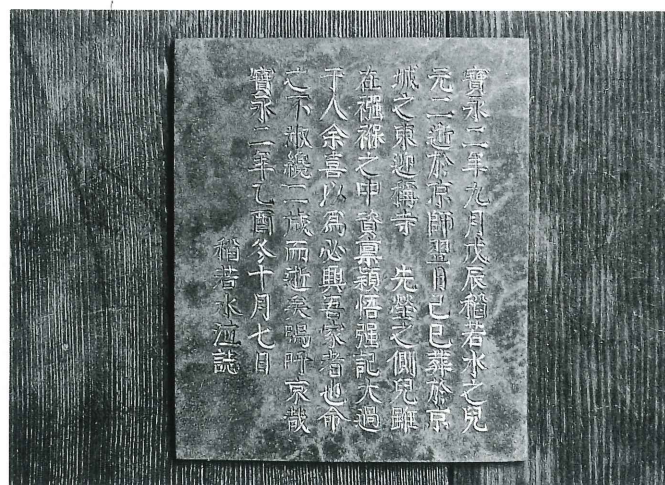
のが本来の姿だという。しかし、すくなくとも日本の、とりわけ江戸時代以降の例では墓石に直接文章をほりつけるのが普通になっていた。本来の姿としては太安磨呂や小野毛人の銅板墓誌が発掘されていることは、よく知られている。だが、江戸時代ではその例が非常にすくないようで、わたしの知見のかぎりでは皆無である。

墓誌の文章自体は、たとえば3)と4)は、撰者である伊藤東涯(伊藤仁斎の長男)の文集『紹述先生文集』におさめられており、他の2者もかならずしも書籍にたよることが困難ではないだろう。墓誌自体の資料価値よりも、墓に埋藏したということに、わたしはおおきな関心をもった。とはいえ、墓誌の文章は実際に金石にほりつけたものが、もっとも信頼がおけるといってよいから、墓誌の出土は慶賀すべきものであることはいうまでもない。

4点のうち、もっともわたしの興味をひいたのは、宝永2年(1705)になくなった息子をとむらった、2)の祭稲生元二文である。ただし、



墓誌銘をおさめた石函



祭稲生元二文

他の3者とことなり、この文章にはタイトルがついていない。内容からみて、死者の霊をとむらう「祭文(さいぶん)」という種類の文章であるので、仮に名づけてみた。他の3者にくらべみじかいもので、全文は次のとおりである。(原文漢文)

宝永二年九月戊辰、稲若水の兄元二、京師に逝く。翌日己巳、葬於京城の東、迎称寺先塋の側に葬る。兄、襁褓の中に在りと雖ども、資稟穎穡にして、強記大に人に過ぐ。余喜びて、必ず吾が家を興す者とおもえり。命の不淑なること、わずかに二歳にして逝けり。ああ哀しいかな。

宝永二年乙酉冬十月七日

稲若水泣誌

祭文は、最初に上のように年月日を記し、作者の死者へのよびかけ、死者の在世の時の回想がつづく。最後に「ああ哀しいかな。ねがわくば饗(う)けよ」とむすぶのが典型である。

おなじように、わが子に対する祭文で有名なものに唐の韓愈がつくった「祭女孺文」がある。

左遷の旅の途上で病死した孺(だ)という娘をとむらった名作である。韓愈はこの時、ちゃんとした葬儀をいとなく余裕もなく、「かりに路隅に葬り、棺もその棺にあらず。既にうずめて遂に行く」という始末であった。そして「汝をしてここに至らしめしは、あに我によらざらんや」と自分をせめ、その罪悪感が名文をかかせた。

若水の場合はそのようなことはない。宝永2年には加賀藩にかかえられ、『庶物類纂』という博物書の編纂に専念し

ている途中で、多忙なりに安定した時期であった。韓愈のような罪悪感や無力感は文章にこめられていない。しかし、それだけに自分の学問を継承させようとおもっていた息子の死は、51歳の父親にとってつらいものがあっただろう。

(京都市歴史資料館歴史調査係長)

六 齋 念 仏

ろくさいねんぶつ
六齋念仏は、平安時代に空也上人が民衆に信仰をひろめるために鉦や太鼓をたたいて踊躍念仏をはじめたのが起こりといわれ、後に仏教で説く六齋日(ふつう月の内の8、14、15、23、29、晦日の六日間をいい、昔は、悪鬼が現れて人命をおびやかす不吉な日として人々は、精進潔齋して身を慎んだといわれる。)におこなわれたので、六齋念仏と呼ばれるようになったと伝えられています。それが、江戸時代中期から次第に風流化し、特に能狂言、歌舞伎などを取り入れた娯楽性豊かな芸能に発展してくるものができましたが、現在では六齋日とかかわりなく盆の行事を中心として伝承されています。

現在京都市内には、15団体の六齋念仏保存会があり、各保存会の方々により保存継承されています。

■主な六齋念仏の公開日と場所

円覚寺六齋念仏	8月7・16・31日	水尾円覚寺
中堂寺六齋念仏	8月9・16日	壬生寺
壬生六齋念仏	8月10日	壬生寺
千本六齋念仏	8月11~14日	千本西陣地区
西方寺六齋念仏	8月16日	西賀茂西方寺
小山郷六齋念仏	8月22日	上善寺
桂六齋念仏	8月22・23日	桂地藏寺
嵯峨野六齋念仏	8月23日	嵯峨阿弥陀寺
吉祥院六齋念仏	8月25日	吉祥院天満宮
梅津六齋念仏	8月30日	梅宮大社
久世六齋念仏	8月31日	久世蔵王堂



六齋念仏の代表的曲目「獅子舞」



六齋念仏の 保存と継承

—連合会十周年を迎えて—
塩見和男

建都千二百年祭を数年後に迎える古都京都に古くから伝承されて来た「六齋念仏」。私達は、これを引き継いで今日迄継承してこられたことを最大の誇りと思っています。

昔は、六齋念仏は全国的に広くおこなわれ、その中で京都周辺は高野山の山麓一帯とならんで集中的に分布したといわれています。その六齋念仏の集団には、空也堂系と干菜寺系とに分けられ、京都周辺だけでも127ヶ所の講中があったといわれています。

その後、逐次衰退しましたがそれでも幕末頃にもかなりの講中が存続した様です。念仏中心の六齋念仏(干菜寺系)、芸能中心の六齋(空也堂系)に類別され、昔は念仏六齋が芸能六齋よりもはるかに多くの講中をもっていたが、幕末から明治にかけてだんだんと芸能六齋に変わっていった様です。明治末年から大正・昭和初期にかけて後継者の不足と社会事情により保存継承が次

第に困難となり、多くの講中が消えて行きました。第二次大戦により各保存会は、しばらく休会の状態が続き、終戦後昭和22年頃よりいち早く次々と復活し約20団体が活発に活動を始めたが、逐次衰退の一途をたどり続けました。当時は、各保存会の交流というものがなされませんでした。現在では、念仏六齋(干菜寺系1ヶ所。空也堂系3ヶ所、内空也堂系2ヶ所休会)芸能六齋10ヶ所(内1ヶ所休会)といった状況です。何とか伝承の方途を見出してもらいたいものです。

昭和52年頃京都府・市、芸能史研究会の諸先生のお力添えにより京都六齋念仏保存団体連合会を結成し、文化庁に大きく働きかけてもらい、昭和58年に国の重要無形民俗文化財の指定を受けた事により愈々責任の重大なる事を痛感し、保存継承に努めるべく各保存会は、六齋連合会を中心にたえず連携を保ちつつ頑張っています。

特に、昭和63年の京都国体に六齋演技を披露したことを契機に、今まであまり交流のなかった各保存会の芸能演技を互いに学びあう機運が高まって来ました。以後、数回に亘り各保存会が相より演技その他、くもの巣作り等色々と講習会をもち各保存会の発展と交流に大いに役立ちました。今後も、永く続けていくつもりです。しかし、念仏六齋に関しては、全く違った六齋なるが故に、共に実施する事が出来ず困惑しています。ただ、互いに親睦を計ることが出来たことが何よりのプラスになったと思っています。

ここに平成4年、六齋念仏が重要無形民俗文化財の指定を受けてより10周年という記念すべき年にあたり「京都の六齋念仏フェスティバル」と題し、11月14日(土)京都会館第2ホールに於て



六齋念仏の保存継承にとりくむ子供達



念仏中心の形態を伝える干菜寺系六齋の西方寺六齋念仏大きくイベントを展開し、この事業を行うことにより市民に広く伝統芸能を理解して頂くと共に、交流を通じて現在休会している団体の再びの復活再生と後継者育成の絶好の機会となろうかと思っています。

終りに、この10周年記念事業が盛大に且つ、これからの六齋念仏の発展につながれば幸いに存じます。尚、今までの京都府・市の文化財関係の方々の御支援、御協力に心から厚く御礼申し上げます。「京都の六齋念仏フェスティバル」の成功を祈ります。

(京都六齋念仏保存団体連合会会長)
中堂寺六齋会会長

京の主な年中行事（9月～11月）

9月

1日	大原八朔踊（午後8時～）	大原江文神社
6日	八朔祭	松尾大社
	万灯祭（9/5・9/6日没～午後9時） 祭典（午前10時） 奉納大相撲（午前8時～午後4時頃） 嵯峨野六斎念仏（午後4時～）	
8・9日	鳥相撲と重陽神事	上賀茂神社
	内取式（8日午後8時） 重陽神事・鳥相撲（9日午前10時）	
8日	上賀茂紅葉音頭	上賀茂神社
	（午後7時）	
9日	重陽の節会（午後1時）	法輪寺
10・11日	観月の夕べ	大覚寺
	（午後5時30分～8時30分）	
11日	ぜんそく封じへちま加持	赤山禅院
	（午前8時～午後5時）	
11日	名月管絃祭（午後6時～）	下鴨神社
13日	御田刈祭（午前10時～）	大原野神社
14～16日	放生会	三宅八幡宮
	14日 宵宮祭 15日 放生会（午後1時～）	
15日	櫛祭	安井金比羅宮
	時代風俗行列（午後1時出発境内）	
19日	平安神宮神苑無料公開	平安神宮
	（午前8時30分～午後4時30分）	
20日	萩まつり	梨木神社
20～26日	秋の彼岸会	各寺院
21～25日	お砂踏法要	今熊野観音寺
	（午前9時～午後4時）	
22・23日	晴明神社例祭	晴明神社
	22日 宵宮祭（22日午後8時） 23日 神幸祭（23日午後1時）	

10月

1～4日	瑞 饋 祭	北野天満宮
	神幸祭（午前9時） 神幸列本社出発（午後1時） 還幸祭（御旅所午前10時）	
1～10日	御香宮神社神幸祭	御香宮神社
	花傘総参宮（1日・9日午後9時） 宵宮祭（9日午後4時）	
7日	北白川高盛御供	北白川天神宮
	（午前8時）	
8・9日	今宮神社例大祭	今宮神社
	御神楽（8日午後7時） 例大祭（9日午前10時）	

9・10日	栗田神社大祭	栗田神社
	神幸祭（10日午後1時） 本殿祭（15日午前11時）	
9～11日	壬生大念仏狂言	壬生寺
	（午後1時～5時30分）	
10日	八瀬赦免地踊	八瀬秋元神社
	（午後8時～）	
10日	六孫王神社例祭（午後1時）	六孫王神社
10日	金比羅秋季大祭	安井金比羅宮
	（午後1時）	
10日	梨木祭（午前10時）	梨木神社
10・11日	講員大祭	伏見稲荷大社
	祭典（10・11日午後1時） 狂言（11日午前11時）	
10・11日	春日祭	春日神社
	前日祭（11日午後5時） 神幸祭（午後1時～） 神輿渡御祭（午前11時～）	
10・13日	伏見三栖祭	三栖神社
	大松明炬火祭（10日） 大獅子頭巡行（13日午前7時）	
16日	新日吉神宮例大祭	新日吉神宮
	（午前10時～）	
16・17日	日向大神宮例祭	日向大神宮
	外宮大祭（16日午後2時～） 内宮大祭（17日午後2時～）	
18日	城南宮神幸祭（午前9時）	城南宮
19日	船岡祭（午前11時～）	建勲神社
19～21日	二十日ゑびす	恵比須神社
	宵ゑびす祭（19日午後8時） ゑびす講大祭（20日午後2時） のこり福（21日午後8時）	
20日	二十五菩薩お練供養法会	泉涌寺即成院
	（午後1時～）	
22日	嵯峨大念仏狂言	清凉寺狂言堂
	（午後1時～）	
22日	時代祭	平安神宮
	京都御所正午出発～烏丸御池～ 京都市役所前～三条京阪前～ 平安神宮午後2時20分頃	
22日	鞍馬の火祭（午後6時頃～）	由岐神社
23日	岩倉火祭（午前1時頃～）	岩倉石座神社
25日	拔穂祭（午前11時）	伏見稲荷大社
26日	うなぎ祭（午後2時）	三島神社
29日	余香祭（午後3時）	北野天満宮

11月

1日	玄子祭（午後5時）	護王神社
1～30日	七五三詣り	市内各神社

3日	狸谷不動尊秋季大祭	狸谷不動院
	（午後1時）	
3日	曲水の宴（午後2時）	城南宮
5～15日	十日十夜別時念仏会	真如堂
	開扉（5日午後5時） 十夜念仏（5～14日午後6時～7時） 結願お練り（15日午後2時）	
8日	火焚祭	伏見稲荷大社
	本殿祭（午後1時）火焚祭（午後2時） 御神楽（午後6時）	
8日	かにかくに祭	祇園白川橋畔
	（午前11時～午後2時）	
8日	嵐山もみじ祭	嵐山渡月橋
	（午前10時30分～午後2時）	
8日	空也堂開山忌（午後1時）	空也堂

保護財団の活動

役員会開催報告

■第46回理事会評議員会開催

去る4月10日、都ホテルにおいて第46回理事会評議員会が開催され、上山理事長をはじめ46名（代理含む）の役員が出席し、平成4年度事業計画並びに収支予算、専務理事等の役員の異動について審議され、いずれも原案のとおり承認されました。

又、会議終了後、引き続き同席上にて伝統行事芸能功労者表彰並びに文化観光資源保護協力者感謝状の伝達式があわせておこなわれました。

■第47回理事会評議員会開催

第47回理事会評議員会が、上山理事長、坂上副理事長ほか48名（代理含む）の役員出席のもと、去る6月9日都ホテルにおいて開催されました。

開会にあたって、上山理事長から急逝されました栗林副理事長（株式会社京都市銀行相談役）の当財団への功績に対し感謝の意が述べられ、

11日	上卯祭（午前11時）	松尾大社
13日	うるし祭（午前11時）	虚空蔵法輪寺
14日	火焚祭（午後3時）	新日吉神宮
15日	法住寺大護摩供	法住寺
	（午後2時～4時）	
16日	火焚祭（午後2時）	恵美須神社
21～28日	報恩講	東本願寺
23日	筆供養（午後2時）	東福寺正覚庵
23日	火焚祭（午後1時）	車折神社
23日	もみじ祭（午後2時）	地主神社
26日	御茶壺奉獻祭（午前11時）	北野天満宮

※都合により行事が中止又は日程が変更される場合があります。

哀悼の辞が捧げられました。

又、会議では平成3年度事業報告並びに収支決算、寄附行為の変更、任期満了に伴う全役員の改選等について審議されそれぞれ原案のとおり承認されました。



役員会

平成4年度事業計画概要

本年度は、厳しい経済環境の中ではありますが、当財団の主要事業であります文化財の修理保存や伝統行事芸能の保存執行等文化財観光資源の保護事業に対する助成の強化を更に図っていくとともに又、昨年度よりおこなっています調査研究活動の推進や啓蒙普及事業、募金活動等の充実、拡充にもつとめます。

会員の皆様のご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

なお、本年度の主な事業概要は、次のとおりです。

I. 文化観光資源保護事業

1. 四行大事（葵祭、祇園祭、大文字五山送り火、時代祭）の保存執行に対する助成
2. 文化財（未指定）の保存修理、防災施設等に対する助成
3. 伝統行事芸能の保存及び執行に対する助成、指導者育成事業
4. 文化観光資源をとりまく自然環境の保全及びその整備に対する助成
5. 文化観光資源の公開、施設整備等に対する助成
6. 近代洋風建造物調査の実施及び調査報告書の発行等

II. 文化観光資源保護思想の啓蒙普及事業

1. 会報の発行
2. 文化観光資源に関する出版物の刊行
調査報告書の発行・文化財カレンダーの発行ほか
3. 文化観光資源の公開事業、会員招待事業の実施
文化特別参観事業・修学院離宮特別参観事業・京の歳時記展開催・郷土芸能のつどい開催・京都三大祭、文化財催物等の会員招待事業ほか

III. 募金活動

1. 地元企業及び全国財界等を中心とした協力要請
2. 市民募金運動の推進
3. 地元社寺関係の協力要請

4. 募金箱による募金の推進
5. 啓蒙普及事業を通じての啓発
6. 刊行物及び広報機関等による啓発

副理事長に上山春平、山城彬成 両理事が就任される

栗林四郎（株式会社京都銀行相談役）、瀬川美能留（野村證券株式会社最高顧問）両副理事長のご逝去により空席になっておりました当財団副理事長にこのたび上山春平理事（京都市立芸術大学学長）、山城彬成理事（日本鋼管株式会社会長）が就任され、当財団の活動はじめ京都の文化財保護、文化観光の促進等にご尽力いただくことになりました。



上山春平副理事長
(京都市立芸術大学学長)



山城彬成副理事長
(日本鋼管株式会社会長)

伝統行事芸能功労者 6 名を表彰

——多額の寄付を寄せられた
篤志者に感謝状贈呈——

京都の伝統行事芸能の保存と発展に長年にわたり功績のあった功労者 6 名の方々と当財団の保護基金に多額のご寄付を寄せいただいた篤志者 3 法人、1 寺院と 6 名の個人の方々に対して、去る 4 月 10 日(金)開催されました当財団第 46 回理事会評議員会の同席上において、伝達式がおこなわれ、上山理事長から受賞者にそれぞれ表彰状、感謝状及び記念品が贈呈されました。

今回、受賞された方々は次のとおり。(敬称略)

□伝統行事芸能功労者

宮本文夫（鳥相撲保存会重陽社）・西村尹男（西之京瑞饋神輿保存会）・和田種次郎（久世六斎保存会）・市原誠二（中堂寺六斎会）・柊宗次郎（上賀茂紅葉音頭保存会）・山本耕一（大原伝統文化保存会）

□文化観光資源保護協力者

(団体)

有限会社タヒチ商事・伸和建設株式会社・西日本旅客鉄道株式会社・本山獅子谷法然院(個人)

柏木章次・田中定子・黒崎永子・甲斐 幹・入山信造・岩井貞三



受賞者のみなさん

京都近代洋風建造物調査始まる

当財団では、文化観光資源の調査研究事業として、昨年度より 2 ヶ年事業で京都市内に明治から昭和初期に建てられた近代洋風建造物の調査を実施しています。

京都市内には、現在約 550 棟もの文化財的価値を有する近代洋風建築が残されており、これらは近代洋風建築が多く残ることで知られる横浜や神戸にも匹敵するもので、質的にも遜色がないといわれています。

今後、ひきつづき現地調査、文献資料調査をおこない、今年度中には調査報告書を発行する

予定しております。

第 60 回文化財特別参観実施報告

国宝醍醐寺金堂・五重塔特別参観 参加者 5,000 名に及ぶ

第 60 回文化財特別参観「国宝醍醐寺金堂・五重塔」特別参観を去る 5 月 8 日(金)～10 日(日)実施しました。

期間中、当財団会員約 1,000 名、一般の方々からの参加申込が約 3,000 名もあり、抽選により当選された方々 1,500 名のほかに、期間中約 2,500 名もの多くの市民や観光客の当日参観もあるなど、3 日間でおおよそ 5,000 名に及ぶ参観者を数えました。

今回の特別参観は、醍醐寺のご協力によりおよそ 2 年ぶりに国宝の金堂、五重塔を公開していただいたもので、五重塔の初重内部に描かれている日本の密教絵画の源流をなすといわれる平安時代の国宝の壁画や又、金堂では醍醐寺教学課長の説明に耳をかたむけながらの薬師三尊像（重要文化財）等文化財の鑑賞がおこなわれました。又期間中、参観者に当財団の事業活動

を紹介したリーフレットを配布し、文化財保護への協力をお願いするとともに保護基金への募金協力の呼びかけをくりひろげ、多数の個人の方々に新しく会

員として入会していただきました。



国宝醍醐寺金堂・五重塔特別参観

— 15 —

事業のご案内

第61回 文化財特別参観

京の夏の旅

「京の御屋敷と町家をたずねて」

— むめいしゃ・らくとうせいしょ
無名舎・洛東静処 —

今回の特別参観は、京都の夏の観光イベントとしておこなわれています「京の夏の旅」にご案内いたします。

普段、見学できない京都の町家や御屋敷が特別に公開されているもので、明治末期に建造された典型的な京町家の「無名舎」(京都市中京区新町)と大正の御大典に建造された大隈重信公ゆかりの御殿「洛東静処」(京都市東山区白川筋三条)の2ヵ所を個人見学していただくものです。

なお、今回の実施要項はこれまでとかわっておりますのでご注意下さい。

- 期 間 9月1日(火)～30日(水)まで
- 公開時間 午前10時30分～午後3時30分まで
- 対象者 財団募金協力者(会員)1名のみ
ご招待いたします。
- 実施要項 見学を希望されます方は、当会報に同封しております招待状をご持参になり、上記の公開日時のうちご都合のよい日時にそれぞれ直接見学して下さい。なお、見学は京都市観光協会係員の指示に従っておこなって下さい。
- お問い合わせ 財団事務局Tel(075)752-0235

これからの主な事業予定

本年度下半期に実施を予定しています当財団の主な啓蒙普及事業をご紹介します。

- 9月 第61回文化財特別参観
- 10月22日 時代祭観覧招待
- 11月14日 京都六斎念仏フェスティバル
- 〃 未定 第62回文化財特別参観
- 〃 第62号会報発行
- 12月 文化財カレンダー発行
- 2月 第4回京の歳時記展
- 3月6日 第23回郷土芸能のつどい
- 〃 第63号会報発行

編集後記



□今回は、当財団役員でもある伝統文化保存協会の石川忠理事長から「東京遷都と御所」について貴重なご寄稿をいただきました。

伝統文化保存協会は、葵祭をはじめ京都の伝統文化への助成や保存活動、啓蒙普及事業等をおこなわれており、京都ならではの貴重な活動をされておられます。

□京都の代表的な民俗芸能である六斎念仏(重要無形民俗文化財)の15の保存会で構成される京都六斎念仏保存団体連合会が、今年設立10周年を迎えられました。

本号では、同連合会の新会長に就任されました塩見和男会長から六斎念仏の歴史、保存継承、10周年記念事業等についてご寄稿を寄せていただき掲載させていただきました。

— 守ろう人権 なくそう差別 —